

# 地域ケア促進専門委員会

## 目 次

### 平成 23 年度地域ケア促進専門委員会調査研究報告書

尾道市医師会「豊かな死」を迎えるための市民公開講座

# 地域ケア促進専門委員会

(平成 23 年度)

## 平成 23 年度地域ケア促進専門委員会調査研究報告書

広島県地域保健対策協議会 地域ケア促進専門委員会

委員長 片山 壽

筆者は平成 22 年度から厚生労働科学研究費補助金(第 3 次対がん総合戦略研究事業)の分担研究を行っていて、研究分担者課題名は「地域多職種・チーム医療による在宅での看取りに関する研究」であるので、まさに本委員会で熟成させてきた地域医療の在り方、地域ケア論に一致するものである。委員会で「豊かな死を迎えるために」を 23 年度テーマとすることを議論したときには全員一致であったことに、この委員会が平成 8 年から脈々と地域ケア・地域医療そして在宅医療を議論し、調査研究を継続した実績を感じた。

今回は委員編成も少し意図的に手を加えたことで、在宅緩和ケアに向けた布陣とした。

現場の訪問看護の経験の豊かな石口房子さん、県立広島病院から JA 尾道総合病院に赴任した石川哲大先生に広島大学地域医療学講座の教授に就任された竹内啓祐先生のほか、広島県庁から棚田部長にも参加をお願いして委員会を編成した。

テーマは在宅緩和ケアで豊かな死が迎えられることの市民公開講座を 4 ヶ所で開催することにより、患者さんが選べる豊かな死への問題提起と在宅緩和ケア、在宅主治医機能、訪問看護の正しき理解であった。

広島県との共同作業での広島市、東広島市医師会、三次地区医師会、尾道市医師会の 4 ヶ所を開催地と決定した。この内容については県医師会速報に優れた報告が掲載された。

### 尾道市医師会「豊かな死」を迎えるための市民公開講座

タイトルは「がんでも自宅での最期が実現できる在宅緩和ケアの理解に向けて」

今回、備後地区は尾道市医師会の担当で市民公開講座の形式としたので、2 月 4 日土曜日 13 時 30 分から尾道国際ホテルで開催し、医療関係者、介護関

係者、市民など多くの参加があった。司会は訪問看護ステーション・在宅医療担当の本多理事、座長は中国新聞客員論説委員の山内雅弥氏が努めた。

### 基調講演

在宅緩和ケアチームが叶える「豊かな死」

片山医院 片山 壽

開業医であるが、岡山大学医学部で 2007 年度より緩和医療学の講義を継続し、2008 年から臨床教授として大学院で在宅緩和ケア・認知症・在宅医療の講座をもっていることを紹介し、現状の医学教育にないがが必要な領域として整備される必要性を強調した。



写真 1 片山講演風景

尾道市の高齢化率は 30.47% となり、高齢の末期がん患者さんが増えていて、自宅での最期を迎えた人も多い。尾道市医師会では JA 尾道総合病院・尾道市立市民病院・公立みつぎ総合病院と連携した在宅医療の体制を整備して「在宅緩和ケア」のシステム化を進めている。今回は実際に家族(ご主人)を看取った人の体験談を交えて、尾道市医師会在宅緩和ケアシステムの検証と在宅チーム医療による「豊かな死」について、在宅主治医、看取った家族、訪問看護、がん拠点病院緩和ケア医らが、実際の現場風景を交えて市民と語り合う講座とセミナー

ウムとした。

今後も形態を変えながら尾道市医師会の継続的な企画となり、市民への周知を図ること、在宅緩和ケアが尾道市医師会でさらに普及すること、医療と介護の総合性を end-of-life-care の概念で構築することで、自宅での「豊かな死」を家族と在宅主治医と病院が共通認識のもとに可能にすることがゴールである。

これは、静岡県立静岡がんセンターの山口 建総長との共同研究（平成 22 年度から 25 年度まで継続の厚生労働科学研究・第 3 次対がん総合戦略研究事業）と同一の方向性である。

研究タイトルは「在宅がん患者・家族を支える医療・福祉の連携向上のためのシステム構築に関する研究」であり、片山の分担研究部分は「地域多職種チームによる在宅での看取りに関する研究」である。また、QOD（Quality of death：死の質）についての論文作成も含まれた。

尾道市医師会方式在宅緩和ケアシステムは、2000 年から稼動している尾道市医師会長期継続ケア・マネジメントプログラム（The OMA method on long-term care management programs）の集約で、end-of-life-care まで対応できることで、この基本設計がフレキシブルな地域医療連携とチーム医療を可能にすることができることで、高く評価されている。

基調講演の中で地域医療連携の集約的な場面として、家に帰る直前の退院前カンファレンスが病院で行われ、家族に在宅主治医と在宅チームが同席して病院側の病院主治医、看護、薬剤師、地域連携室などから適切な情報提供がなされることで、地域医療連携として成立するわけである。すなわち、退院前カンファレンスの後は、在宅緩和ケアによる自宅での生活が待っているわけであり、ご本人、ご家族の希望を実現するための 15 分のイベントである。

今後も研究と実践から 2002.12.22 の武田文和先生の講演会で座長を務めたときに宣言した「尾道市医師会はがんの痛みのない医療圏を目指します宣言」を実現すべく、尾道市医師会と JA 尾道総合病院、尾道市立市民病院、公立みつぎ総合病院と一緒に体制整備を進めていきたい。

## シンポジウム

座長：中国新聞客員論説委員 山内 雅弥

コメンテーター：片山 壽

座長からこの豊かな死を迎えることができる日本であるかどうか、大変重要な国民的テーマであり、昨年 2 月も圏域研修会で山口総長の基調講演の座長を務めたが、自分も医学の博士号を持つ身であるので、今後もこの領域の議論をすすめて行きたいと思っていると意義を強調した。



写真 2 安田さん、片山

### ① 末期がんの夫を在宅緩和ケアで看取った経験から

安田良華さん

病院のカンファレンスの様子や病院主治医と在宅主治医の申し送り、在宅復帰後の具体的な在宅チームによる緩和ケアの様子を、在宅主治医（片山）がパワーポイントで映しながらか、ご本人の想いや自分の感じたことを丁寧に語られた。ご本人がいかに病院から帰りたいか、家に帰って手厚い在宅緩和ケアチームにより抗がん剤の副作用も軽快して、痛みもなく、集まった孫家族らとの「パーティ」がいかに楽しかったか、いろんな医師との触れ合いがあったことなど。

特に在宅緩和ケアで痛みがまったくなく、病院で抗がん剤の副作用がありひどい口内炎で食べれなかったが、歯科医や耳鼻科医、歯科衛生士、訪問看護などでのチームケアで食べれるようになり、リザーバーのラインも在宅主治医が外そうと言って、娘がくれたスポーツシャツを着れたときの写真は素晴らしい笑顔になっている。在宅医療はお金がかかるかと前に質問されたことがあるが、「これだけしかお支払いしなくていいのだろうか、と思った」と語られた。

この安田さんの発表には横に片山が座り、在宅主治医としてPCを操作しながら、実際の在宅緩和ケアの風景を紹介して、最終部分は尾道市医師会方式在宅緩和ケアシステム取材を2009年に行った研究者が抽出した概念を提示して市民に分かりやすく伝えた。

② 訪問看護ステーションの在宅緩和ケアへの関わり

尾道市医師会訪問看護ステーション管理者  
三藤浩子

1995年から尾道市医師会訪問看護ステーションの管理者でデンマーク研修や神戸市看護大学の在宅看護の非常勤講師をした経験を持ち、早いうちから在宅チームで在宅緩和ケアを行っていた。発表では在宅主治医とのチームで在宅緩和ケアができることを分かりやすく伝え、カンファレンスの意義や在宅看護の重要性を説明した。在宅緩和ケアという表現が定着する以前から、尾道市医師会で行っていた数々のがん患者の看取りの経験をもつ頼もしい訪問看護である。



写真3 石川 三藤



写真4 シンポジウム全景

③ がん地域連携拠点病院の緩和ケアチームの代表として

JA尾道総合病院総括診療部長 石川哲大

安田さんのときには退院前カンファレンスが急に決まって、在宅主治医はじめ泌尿器科医、訪問看護ステーション、医院看護スタッフ、薬剤師がさっと集まって、病院主治医に許可をもらったレジデントが司会進行を見事にこなした。研修医や連携担当副院長、病棟科長、薬剤師、栄養士なども揃い、スピードのある連携ができた。また、退院されて12日目の在宅緩和ケア・カンファレンスにレジデント、研修医、病棟科長、連携室長らと参加して、在宅主治医である片山医院には、在宅側から内科の在宅主治医、外科、泌尿器科、耳鼻科、歯科と5人の医師チームが揃い、訪問看護、薬剤師、医院看護スタッフ、歯科衛生士、が安田さんを囲んだ。

このカンファレンスが目に見える連携として安田さんの在宅緩和ケアを構成していることが、理解できた。入院中よりいい状態で、痛みもなく食べれて、家族団欒ができていることは素晴らしい。

在宅緩和ケアへのバトンタッチとして、患者さんの家に帰りたいという気持ちを病院側もよく理解するべきである。

④ 指定発言

肺癌の父親を在宅緩和ケアで看取った壺岐悦子さん

病院嫌いで頑固な父親であったが、久々に片山医院に受診して検査をしたら進行した肺癌が見つかった。尾道市立市民病院に紹介され検査を行ったが、脳に転移もありすぐに太田記念病院でガンマナイフを行い、いい経過で尾道に戻った。入院したくないので尾道市立市民病院呼吸器科の巻幡先生に無理を言って「かあさんのミックスジュースが飲みたい」と急遽、家に戻るようになったが、日曜日に病棟で片山先生、巻幡先生の二人で娘の私に病状をICしてくれて納得できた。両親は聞きたくないということであったので長女として、余命のことや在宅緩和ケアを片山先生が往診してくれることを聞いた。家では点滴で元気になったところで庭の剪定をするのが好きで、伸び伸びと家で痛みなく過ごせたことはよかった。やはり、家が一番であるので、在宅緩和ケアは普及するべきである。シンポジウムになり会場からの質疑応答もあり、今後、この在宅緩和ケアによる豊かな死の公開講座は、いろんな形式で尾道市



写真5 会場風景

医師会として継続していくことをアナウンスして座長が締めくくった。

各地区ともに有意義な市民公開講座となり、本委員会としては今後の継続を祈念するものである。開催にあたり、企画から実施にあたりご尽力をいただいた皆さんに深く感謝申し上げます。

広島県地域保健対策協議会 地域ケア促進専門委員会

委員長	片山 壽	尾道市医師会
委員	石川 哲大	JA尾道総合病院
	石口 房子	YMCA 訪問看護ステーション・ピース
	井上予志栄	広島県社会福祉協議会
	大貫 仁士	竹原地区医師会
	大本 崇	安佐医師会
	小笠原英敬	佐伯地区医師会
	奥野 博文	広島市中区役所
	吉川 正哉	広島県医師会
	小島 隆	広島県歯科医師会
	兎玉 雅治	福山市医師会
	佐川 広	大竹市医師会
	竹内 啓祐	広島大学医学部
	棚多 里美	広島県健康福祉局
	東條 環樹	山県郡医師会
	初鹿 祐二	三原市医師会
	鳴戸 謙嗣	三次地区医師会
	楠部 滋	東広島地区医師会
	西垣内啓二	呉市医師会
	檜谷 義美	広島県医師会
	藤原 恵	松永沼隈地区医師会
	楨坪 毅	広島県医師会